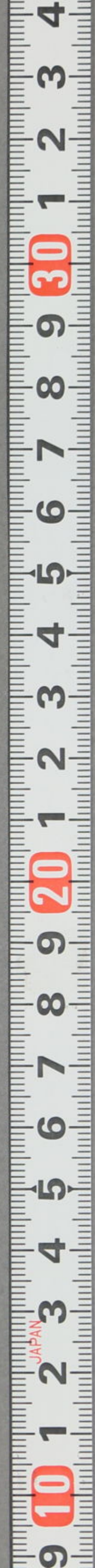


和漢

朗詠國字抄

三四





和漢朗詠集抄卷之三

秋

立秋

蕭颯涼風與衰髮。誰教計會一時秋。

蕭颯、秋風起。涼、涼、風、我、衰、髮、の、衰、る、と、誰、人、計、會、て、秋、の、立、と、一、時、か、い、あ、る、と、の、計、文、集、に、同、く、作、る。

雞漸散閒秋色少。鯉常趨處晚聲微。

秋、の、も、ち、一、葉、散、れ、作、る、雞、の、庭、に、わ、ぶ、と、の、也、紅、葉、す、一、葉、庭、に、散、ら、れ、其、比、も、初、秋、の、景、色、少、く、一、説、小、楓、を、雞、冠、木、に、云、雞、散、す、ハ、楓、ち、も、鯉、常、趨、處、ハ、庭、と、い、ふ、孔子、の、子、誣、生、の、歡、小、鯉、を、贈、る、あ、り、と、て、名、は、鯉、と、け、け、と、家、語、に、あ、り、孔子、庭、に、立、

の、前、を、鯉、趨、り、過、て、詩、を、ま、る、と、礼、を、ま、る、と、教、ら、る、と、論、語、に、有、され、又、の、教、は、庭、計、と、云、く、小、云、と、ら、ハ、庭、に、葉、ち、る、比、ハ、ま、秋、風、の、音、

明詠國少

卷之三

火

一

秋 立秋  
蕭颯涼風與衰髮。誰教計會一時秋。  
雞漸散閒秋色少。鯉常趨處晚聲微。





毛の暮る木の葉ちる聲微々る○作者保胤の師菅三品推去あり  
 後の亭より文會あり其時の詩るる庭訓の故事情致深き

秋まぬとめぬらふふん秋も風の言ふぞおもひぬる 敏行

清いあざもやうとせいで  
 外に心こもる通りなり

後撰 ちつちつあぢぢとせよひはせらるる秋のたぢぢぢと思ひはせらるる

後撰集より入るはあつちつちつ  
 指當といふは詞の外はさしこもる

早秋

但喜暑の三伏に  
 隨て去りて不知秋  
 の二毛を送來ん

但喜暑隨二伏去不知秋送二毛來

三伏は火氣盛なり秋の金氣伏はくる夏の部納涼が終す暑はもう  
 三伏の終に去る歌の瀧岳字安仁秋與の賦を作文選小出其序に二毛の  
 二毛此人容貌すれはけり三十二の年とめて鬢實は白髪が二毛(注)  
 二毛と書しより三十二と二毛の年と云三伏は暑の去行つての喜で日

槐花雨濕新秋の  
 地桐葉風涼夜か  
 うんと欲する天

月の過去て老の  
 來る城あつちつち

槐花雨濕新秋地桐葉風涼欲夜天

炎景剩残て夜尚  
 重晩涼潛か到て  
 筆先知

炎景剩残夜尚重晩涼潛到筆先知

秋の日數いくなくもかまも大炎暑の景氣がま残り剩て  
 夏夜もけけ厚重むとつと晩涼か涼か涼かに到て筆が冷りるを秋の  
 涼さハ筆が先(知る)と云へ青竹を編て葉と暑は  
 さくる敷をのしるは是をたうむらとつちや

秋もていくもあつちつちとあつちつちのねぬらむらびの風はせすしも 安貴王

この後ぬら寝ぬらとあつちつちの風ハ朝明の風ハ秋立てるやども  
 かくとも明方の風ハせすしと驚らるるものなま助字

七夕

七月七日の夜牽牛織女の二星會すして酒果哉  
 献し琴瑟けつし針線けつし兒女詩歌の巧を



憶得少年長乞巧  
竹竿頭上願絲多

二星適逢未叙別  
緒依依之恨未  
五夜將明頻  
涼風颯颯之聲

憶得少年長乞巧竹竿頭上願絲多

世の少年の行末長く態藝の巧むんと乞を憶得ず其故

竹の竿の頭に五色の糸を乞ふ人多きにつけて是を知る男女の少年

詩哥の乞ふ文筆の達せんしを祈絲竹のこゝ績紡の業の巧むんと乞

乞ふ其奠由乞巧奠と云願の糸小嬉子あつて細を乞ふ得たりとい

此夜鳥鵲河小填て織女河渡りて是等の説實理

二星適逢未叙別緒依依之恨五夜

將明頻驚涼風颯颯之聲

二星小かゝりて更の明んとすを惜む題の詩序に牛女の二星年に一度適

より五更にゆる一夜が間も明んとて朝風頻に颯々涼と恨も

のぶるの夜は明ると驚く五夜は五更より颯々風の音に依

露應別淚珠空落雲是殘粧髻未成

曉の露は二星別をわび涙の珠の落る成て朝の雲のこれむる

七夕姫の思乱きて粧も調残てうちむる髻もんと星も露を

涙とらひ雲を髻と云うけり空と云字が眼目や博物志小鮫人

水に住るのあり淵客とも云水中より出人家に宿りうらむ羅を織

巾に出して沽せり別れのそまに器をこひ泣て珠を

出盤にまもつて是をわと去とあり涙の珠の故事

風從昨夜聲彌怨露及明朝淚不禁

昨夜より相見んと思ふより怨る心をやあるを云

明朝別るにむらび涙もあがるに風も露も天象の字を對

去衣曳浪霞應濕行燭浸流月欲消

七夕姫が媚て天の川を渡る題して作る別れ去る時の衣が浪を

曳てぬぎたる裳小天の河かゝる朝霞をも濕す清る月の道



詞ハ微波に託し  
且遣し雖心片月  
を期して媒と爲し  
欲す

行燭をてしれづ天の川の流を渡り  
浦んとす皆川をさるるをいふ

詞託微波雖且遣心期片月欲爲媒

七方の云くそすき詞ハ天の川の微波に託して此方の岸より  
彼方の岸に言遣きと猶心中ハ七夜の片月の出るを期謀して逢んと欲

てし川は遠まじりけり終もまがはかばか二年にこそまて人丸

後撰集よりみ人あらずと有るをいふ人丸はかたれども君がうらみかてハとあり  
君ハ七夜をさす天の川の遠ま渡りぬらまきと君が舟出二年にこそ待て

あひせん秋のと有 一とせに一度ハさるに契かき逢瀬ハ千五年

うらりなるもさるるあはれりさ中なりとのあはれなり

年どのあやハすれど七夕のぬる夜に教ぞすれんる 船屋

七夕のむら〜逢まじり年ハ一びるをいふ  
いふ年ハうらとあはれ夜のさるるなり

秋興

林間煖酒焼紅葉石上題詩拂綠苔

仙遊寺より即興の詩ハ林の間に酒を煖さんて紅葉を焼石の上  
の緑の苔を打拂つ坐して即興の詩を題 或云紅葉火の如く折焼ハ非

楚思淼茫雲水冷商聲清脆管絃秋

白居易江州左近の路あり黃鶴樓より秋の景色をかめ物われ 白  
きん昔楚の屈原が流されを身の上比し作されは楚客の思水淼茫ハ

水廣じて雲を浸すも樓より望物冷る景ハ宮商角徵羽の五音  
商の聲を秋ハ清脆ハ聲すすもは樓上に酒宴管絃をさるる

心を慰まども秋の声あはれ  
ふ〜に鮓なり

大底四時心捻苦就中腸斷是秋天

人の世に立大底春夏秋冬四時とも折ふ事ハさるる氣をいふ  
心捻苦すもあはれ就中腸も断るる思はるる秋の天なり

秋興  
林間に酒煖  
紅葉焼石上  
詩を題して綠苔  
を拂

楚思淼茫  
雲水冷商聲清脆  
管絃秋

大底四時心捻  
苦中就中腸斷  
是秋天



物色ハ自客の意を傷むるに堪らざる愁の字を將秋の心に作(宜)

物色自堪傷客意宜將愁字作秋心  
旅の舎して秋の心を作ると樹々の稍黄を紅葉やうて散野相公  
べき風情あり朝の野辺の露夕の野分の風入る物皆秋の景色復いて  
自然と旅客の意を傷むるに堪らざる愁の字を秋の心に  
作るに宜しきなり 笠九遷の時の作りなり

由來思を感ずるに秋の天に在多ハ當時の節物に牽被

由來感思在秋天多被當時節物牽  
感思ハその哀からる由來秋が弟下や時に當ての景色 田達音  
月の光風と音虫の聲など節物に牽被るは是に牽きて下や次の句同詩

第一心を傷むは何の處最竹風葉を鳴す月の明なる前

第一傷心何處最竹風鳴葉月明前  
上の句に通じ絶句一章へ心を傷むるは何の處最第一なる  
月の隈に竹の夜竹の葉の風の音づるを取すこれなり

蜀茶ハ漸浮花の味を忘楚練新傳擣雪聲

蜀茶漸忘浮花味楚練新傳擣雪聲  
又茶の淡を浮花にも楚練の名産あり秋來と練帛を擣て  
寒を防ぐ用意なるは色の色白を練雪にもよる是寒來の心へ  
新拾遺

新拾遺 盤余野ハ大和国十市郡なり

新拾遺 盤余野ハ大和国十市郡なり  
秋は夜夕なるをいへるは秋のうら風萩の下なり  
義孝少

秋晚 相思夕上松臺立

秋晚 相思夕上松臺立  
秋真らうの心へ秋の夕上を相  
かげりて凡るも勝るなり

上立バ菘思蟬聲耳に満て秋

相思夕上松臺立菘思蟬聲滿耳秋  
李十一郎州に行き留まら其東亭に坐して秋の夕上を相  
思ふ松を植ふる臺の上へ菘の鳴も思ふに蟬の聲も満る  
秋の夕上を相思ふに蟬の聲も満る  
一入李十一が菘もなり



山を望み幽月猶  
影を藏り砌の  
飛泉轉聲を倍

秋夜  
秋夜長夜長  
眠と無き天も明  
不耿耿と殘燭  
壁に背く影蕭蕭  
暗雨窓は打  
聲

遅遅と鐘漏  
初て長夜耿耿  
星河曙んと  
欲する天

燕子樓中霜月  
の夜秋来て只  
一人の爲に長

蔓草露深人  
定て後終宵雲  
盡ぬ月の明の前

蒹葭洲裏孤舟  
の夢柳營營頭  
明詠國字少

望山幽月猶藏影。听砌飛泉轉倍聲。

嵯峨法輪寺にて口号す。山の端に入りて月影を藏り。管三品  
を吹く。砌の石を大井河のやうに飛泉の流の聞ゆる。夜深るに  
從ひ轉音高し。  
新古今  
どうぶつとの思ふたはのふんぬ。秋の夕暮。笑之

新古今集よりみくもびあり  
小倉山、京西山あり

秋夜

秋夜長夜長。無眠天不明。耿耿殘燭

背壁影蕭蕭。暗雨打窓聲。

唐の玄宗皇帝楊貴妃を寵し。まゝに後宮の美女をか貴妃と  
す。別を取らるる。其中に十六歳より六十歳まで上陽宮と  
都の坤をとりてまゝに居て一生むかひ物思ひありし  
は。老女あり上陽の白髮人。云々。是は題。樂府の文

遅遅鐘漏初長夜。耿耿星河欲曙天。

長恨歌の句。唐の玄宗楊貴妃に後物思ひに。秋の夜も  
長く宮中の鐘の音水漏の刻も遅々更がけける。漸曙近  
星河欲曙天。

燕子樓中霜月夜。秋來只爲一人長。

白氏徐州の遊。時張尚書酒をす。舞妓を呼ぶ。白  
を出。張氏卒。後。白の燕子樓と云。彼時々独任  
して十二年の春秋を送る。白氏あれ。此詩を作。霜夜の月の  
秋の夜は。只我が身むら。のま。長は。云々。

蔓草露深人定後。終宵雲盡月明前。

秋の夜先祖の廟に詣て作る人。寝定る。比ま。とて蔓  
草。露深。終宵。白のま。とて月。明。野相公

蒹葭洲裏孤舟夢。柳營營頭萬里心。

蒹葭。先づ孤舟を。浮寝に。故郷。夢。柳。紀齊名  
柳。胡國に。多。其旅。營。日。數。送。胡。塞。萬里。の。外。に。都。を。思。人。思

明詠國字少



万里の心

拾遺

わりの心を尻をさるをのぼし夜寝しうとねん

人丸

足引山とせん枕詞草臥足袋曳つ山を上げる小もつりいりも長を云  
よと山鳥の尾のまじり尾とつげり又山鳥は独寝心をさるといふなり  
一のハ助言すそふさぐさ思ふ人かかるとぞ寝る寝んすんと寝  
入るんかハ疑ふ辞もハ助の辞一説に山雞雌雄虎成へぞ寝  
古今

しつどもまじりしをぬくぬくふらふづら秋のさびてまハ  
眠言も未云々々々夜も明行ぞ秋の長一しつ夜はつとぞ  
いづらんといづらぞとてまといふをつらさる詞是ハ古今集俳諧哥へ

八月十五夜 舟月

秋ハ金氣の月をさぞ  
最他季に勝る此

秦甸之二千餘里

凜凜と氷鋪り

漢家之三十六宮

澄澄として粉飾り

秦甸之二千餘里凜凜氷鋪漢家之  
三十六宮澄澄粉飾

公乘儀

愚響 錦字 詩國 一巻 行著

錦織機の中

已に相思之字

擣衣を擣砧の上

ハ俄ハ怨別之聲

を添

織錦機中。已に相思之字。擣衣砧上。  
俄添怨別之聲

同前

三五夜中新月の

色。二千里外故人

の心

三五夜中新月。色。二千里外故人心

禁中に宿直か。月夜々。詩友元稹を憶て作る三五の十五夜ハ百

今東方より新に。出る月の色す。れ。は。元稹も。二。千

月夜



高山表裏千重  
の雪洛水高低兩  
顆の珠

里の遙く在て大方今夜の月を弄ぶるん心の内思をうつると當意  
有の傍も幽玄の句に説に中秋最中年に一度の月を新月と云故人友  
高山表裏千重雪洛水高低兩顆珠  
山大高き山と云五岳の中岳を高山と云月の光を白  
山の表裏千重雪の降るに月光洛水に影をうつり高く空の低  
水に影うつ兩顆の玉あるやん玉を一顆と云數のまのど  
洛水は京北洛縣よりうつりて入るなり

十二廻の中此夕之  
好るに於勝るは  
無千萬里の外皆  
吾家之光を於筆

十二廻中無勝於此夕之好千萬里  
外皆爭於吾家之光  
十二回十二ヶ月之年中に此夕の月の勝て好なり千萬里の外まで各  
光を賞しこれに過て月の清き如わじと思ふ八月十五夜の詩の序に  
碧浪金波三五の初秋風計會似空虚

碧浪金波三五の  
初秋風計會似  
空虚似

碧浪金波三五の初秋風計會似空虚  
秋の池澄て碧の浪の三五の初夜の月映り金の光波のふた  
秋の風冷やうり計會せて池水を空虚と云ふなり此詩下に通下一律に

自疑荷葉凝霜  
早人  
道蘆花雨と過て

自疑荷葉凝霜早人  
道の詩三四の句に池の荷葉の月の照をうつり早く霜の凝るなり疑  
蘆の葉に映する若の花が雨の後に散餘るなり若花は白く白く月を云

岸白還迷  
松上の鶴潭融て  
算可藻中の魚

岸白還迷松上鶴潭融可算藻中魚  
前の詩五六の句に池の岸の月の光白くして松の上は白鶴が居る  
うと迷潭は底まで月影を透して藻に住魚の數も算すなり

瑤池便是尋常  
の号此夜の清明  
玉不如不

瑤池便是尋常号此夜清明玉不如  
前の詩の落句に是まで七言律一章に崑崙山の邊に池あり玉多し  
瑤池と名づくこれをもたは尋常の号に此夜池水に月のやどり玉も及ぬ

金膏一滴秋風  
露玉匣三更冷漢  
の雲

金膏一滴秋風露玉匣三更冷漢雲  
秋風露の滴は洛の月の鏡を磨金膏の雲より三更の空に音三品  
月は掩る雲の鏡を納る玉の匣も冷は漢の秋の空を云玉は夜と詞

楊貴妃歸唐帝  
思李夫人去漢皇情

楊貴妃歸唐帝思李夫人去漢皇情  
明永國字少



の思李夫人去く  
漢皇の情

月

誰人隴外久  
征戎す何處  
庭前新別離  
す

秋水漲來て船の  
去と速けん夜雲  
收盡て月の行と  
遅

黔中に醉不  
去得ん麻圍山の  
月正の蒼蒼

明水國字少

卷之三

和

一

唐詩集

雨夜の月を題して作之。農の楊玄琰が女王環まもる。容色源順  
なり。高力士唐の玄宗の後宮にす。楊貴妃とて帝の寵愛限り。その  
兄楊國忠丞相の位。昇國政をぬき。民怨怒して終に大乱とす。  
時に安祿山といふの揚國忠を討。僞長安の都。成。い。も。帝ハ貴  
妃。成。蜀。落。馬嵬原。陳元。帝の馬前に伏。帝ハ  
貴妃を多。民の怒を休。帝ハ高力士に命。傍の佛堂。く  
貴妃を。落行。事去時。従。貴妃の。思  
ひ中。節物。心。歸。人死。土に歸。義之  
李延年。李夫人。漢の武帝の恩。深。病。罹。帝  
歎の。畫工。仰。形。画。反。壘。香。焼。其。魂。招。心。の。闇。に  
悉。雨夜の月。戀。似。思。と  
云。情。と。云。戀。意。

拾遺  
水の面にてる月を。秋の空。中。る。る。

一とせの月の次第。廿五日。十五日。秋  
三月の。中。水。の。面。と。云。月。と。云。け。り。

月

誰人隴外久征戎。何處庭前新別離。

隴外。胡塞。都。胡。の。隴山。あり。城。を。築。て。胡。國。  
都。を。伺。んと。す。守。む。此。あり。隴外。と。云。今。宵。月。明。ら。る。  
誰人。萬里。に。軍。兵。を。帥。來。て。戎。を。征。む。都。を。思。い。ん。又。つ。れ  
の。處。で。今。夜。の。月。に。新。に。別。離。て。袂。を。ま。つ。庭。も。あ。ん

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遲。

東方。に。歸。ん。と。船。を。汁。水。を。こ。る。秋。の。水。滿。て。船。速。く。月。の。野。展  
雲。間。あ。る。空。を。轉。す。も。夜。深。雲。收。て。快。晴。の。空。も。月。が。一  
所。あ。る。と。く。行。と。遅。と。思。え。り。

不醉黔中爭去得。麻圍山月正蒼蒼。

蕭處士。黔南。遊。び。行。を。送。る。詩。黔。中。と。云。其。處。巴。峽。の。江。白  
水。字。は。巫。陽。の。猿。の。斷。腸。の。聲。あり。酒。を。過。し。醉。す。ん。ば。ど。む。む。く  
歸。去。ん。折。り。も。麻。圍。山。の。月。の。光。蒼。々。と。出。ん。景。物。の  
少。く。を。云。白。氏。文。集。第。一。の。詩。と。云。全。篇。七。言。律。

卷之三

和

一

唐詩集



天山不辨何年の雪ぞ合浦の珠  
迷應舊日の珠

天山不辨何年雪合浦應迷舊日珠

禁庭の月夜もめて作る胡国の天山は四時に雪消す年を  
積で降車もどしつぬかふる潔白雪降るあつ年の雪とも辨る

かり月夜雪に合ふる入合浦と云ぬ良吏入来て政事善まら濱  
珠がより来り酷吏在て政事悪まら珠去て交趾縣と云ぬ

る後漢書に合ふる孟嘗君字伯周合浦の太守なり其地耕作  
珠を取る産業と成然るに先の太守貪残少ぬ珠つりてかり

一が政正に合ふ珠もくかり来りし今月の光を珠のどくえかて  
去る珠がのるりくるか迷ふもろくたて舊日の珠と作り

欲和豊嶺鐘聲不其奈華亭鶴警何

山海經に豊山に九鐘あり霜降と和して自ら鳴嶺と云  
云じ月の光霜に似るか鐘和する否と云ふ又遠城華亭あり鶴

来てまもる城を射んとする小空中に声して丁令威家去て千年  
かて今より来ると鶴の鳴る神仙傳に出又千年の鶴霜降る時声は

飲で鳴すとある也敬言と云月の光の霜も華亭の鶴の聲は警  
るやいかにわんとのころちり此詩夜月秋霜に似るといふ題を作

郷淚數行征戎客棹歌一曲釣漁翁

胡塞の兵戎帥と我征一万里の旅客と云り居て月の光や  
るに故郷を思ひ涙が數行流る釣漁して世をさる翁が月の明る

り棹棹て船哥唄一曲もさるるて聞ゆるの寂れたる山川千  
里の月すもる城題とする也上の句ハ山下の句ハ川を作り

天のもぬりユクもま去りける三笠の山か一月を 仲波

安倍仲誓元正天皇の宝龜二年八月遣唐使に同船し學文のため小  
入唐す唐の玄宗帝の時留学の後日本歸ると明州の津小艇する時

彼国の文化友餞して詩章を贈折し海の彼に月一ののる城もてまら  
天の原ハ空をひらた意を原と云りぬ仰を遠くかんと云こまをやり

らつと云り三笠山春日か和州南都ハ万里の外まですこころ面白  
月城ぬり仰がまら奈良の京かまてまらり月心か浮びかハ詠くハ附字

古集集よハよみ人まらげうす両説ありハ一首の哥とも云月のまら家  
雲井なるふ飛の敷まらぬしにらんぬらり

古集集よハよみ人まらげうす両説ありハ一首の哥とも云月のまら家  
雲井なるふ飛の敷まらぬしにらんぬらり



九月九日 付菊

燕ハ社日ヲ知テ巢ヲ去菊重陽ノ爲ニ雨肩開

九月九日 付菊

燕知社日辭巢去菊爲重陽肩雨開

採故事於漢武則赤萸插宮人之夜

尋舊跡於魏文亦黃花助彭祖之術

之夜挿舊跡

先三遲兮吹其花如曉星之轉河漢

引十分兮蕩其彩疑秋雪之廻洛川

谷水洗花汲下流而得上壽者三十

谷水洗花洗下

拾遺 拾遺集小屯の婦人有りこゝの助字を浮世に多し心物思とも

あゆむも月の感情のあはれ幾度か詠つらん物想を入月うち眺むとする云

九日汝が家災あはれ家人しよく終囊小茶黄葉盛て臂の上

にご多高に小登て菊花酒を飲め此福消んと云家こ

て奇異感感せし是より重陽山の上り茶萸菊酒を用ふと

二八月の中氣を春分秋分と云其の近き日の社日とす二年

兩度あり此日立敷の神を祀の名燕ハ春社の比來り秋社の比巢を辭く

去九ハ極陽の數月と目と九を重るゆ重陽と云菊が此日かあらんとす

雨を肩帯て吹とふけり此作者官を辭す志ある也燕萸とく時を知慮

群臣に菊花を賜を題す詩の序今禁中九月九日茶萸を

挿むて流行はる其故事を追はむし漢の武帝宮人の袖かきせし

と云魏の文帝九月九日鐘繇と云臣に菊一束送るし書に謹奉一束以

助彭祖之術と彭祖菊を服して壽延七百歳とて容貌十七八歳の

と云仙傳小出此日跡をばて今も君臣に菊花をふる菊ハ黃花を賞

上と同し序文を盡し酒をうけ三つひ甲一遲る時飲然せし藥とせし

故に酒は三遅とも云孟に黃花を泛回て遅らる先に吹花の旋る曉

の星の河漢に轉るやにあり酒は十分引くけり白菊の動く色ハ時

りぬ秋の雪洛川に廻る伊洛川と唐の大河を黃白と星雪喻



流を汲而上壽哉  
得者三十餘家  
地脈味を和す日  
精を食而年顔を  
駐者五百箇歳

餘家地脈和味。食日精而駐年顔者  
五百箇歳

是も同一序。南陽。鄧縣の山。其甚。山上菊花多。洗落。水。或。其流。末。三十餘家。人。此水。飲。長壽。劉。文。苑。出。上。壽。百。年。中。壽。八。十。年。下。壽。四。十。年。地。脈。藥。之。劉。生。と。云。仙。人。白。菊。花。の。汁。蓮。花。の。汁。地。脈。の。汁。を。丹。和。蒸。服。さ。る。と。一。年。つ。お。五。百。歳。保。仙。方。是。を。日。精。と。し。年。老。て。顔。色。衰。さ。る。と。年。顔。駐。と。作。り。又。い。う。く。菊。花。を。日。精。と。し。菊。根。を。地。脈。と。し。仙。家。の。服。と。知。え。拾。遺。で。こ。う。考。へ。の。ま。は。し。あ。ら。う。と。い。う。は。い。り。て。測。と。る。ん。え。痛。前。の。序。文。小。註。も。鄧。縣。の。谷。に。菊。水。汲。て。壽。得。る。故。事。と。す。宿。の。菊。露。幾。垂。つ。り。て。か。の。谷。水。の。で。く。淵。と。い。ふ。と。い。う。と。い。う。と。い。う。

菊

和名加波良與毛木  
日精草ともいふ

霜蓬の老鬢二分白  
露菊の新花  
分白

霜蓬老鬢二分白。露菊新花一半黃

ハ一半黄

不是花中偏愛菊  
此花開後更無花

是花の中に偏に菊  
を愛するはあらず此  
花開て後更に花無  
きをかり

嵐陰欲暮契松柏之後凋  
秋景早移

嘲芝蘭之先敗

紀納言

嵐陰暮と欲して  
松柏之凋之後  
契秋景早移て芝  
蘭之先敗を嘲

殘菊の詩の序へ嵐陰、秋の時を云秋を暮にして草木を衰は菊のそむり松柏とこの諸木の後に凋んとを契ておとら秋の景色も早移て末の芝芝蘭のちと後を敗を菊を嘲と笑ふ  
禁庭の菊の久く残るを祝して作す

鄧縣村閭皆潤屋  
陶家兒子不垂堂

鄧縣の村閭は皆  
潤屋を潤し陶家の  
兒子不垂堂せ不

黃菊一叢咲乱と金を散せと云と云題へ鄧縣菊花多を三善清行村閭富家と云と云菊花を金と云と云屋を潤す富を云大徳の詠



蘭苑ハ自慙爲俗骨  
爲トは慙 慙 慙 離  
ハ長生有トは信せ  
不

蘭蕙苑の嵐紫後  
蓬萊洞の  
月霜を照す中

陶淵明ハ東籬に菊を植て愛せし 垂堂ハ堂に上り危る事をする 備夫の  
の取業を云古語に千金の子ハ垂堂せずと長淵明が家の兒子ハ危業ハせし

蘭苑自慙爲俗骨 慙 慙 慙 離 不信有長生

蕙ハ草の中の仙人を題とし仙家の仙相を金骨とひされど 儂  
蘭の苑ハ枯やすく我身の俗骨ハ慙慙慙のヲをもちやうな花を  
其離に菊の長生ハ千年の秋枝  
儂ハ慙かるとも信ハ思ます

蘭蕙苑嵐紫後蓬萊洞月照霜中

蘭蕙の紫を秋の嵐に推して散らせしれど菊ハ蓬萊仙人洞の花 菅三郎  
もハ冬をむく月の霜を照す中にも盛るるぞ 是をちくの花をて菊の殘題

久々の雲のうらやまらん多葉ハあまの早とがわやまなはるる 敏行

敏行ハ殿上も許されば寛平の御時やて菊の花はあまのひるく  
久堅ハ雲といはん枕詞雲の上ハ殿上へ上り弄ひる菊を卑眼ハ空の星と見違し  
ふわてはのちかちんゆきもはるるをせは志く葉の花 如恒

初霜白く置まぐるる花やん霜やん心當に推量して  
折ふ折ふさくわらわらん思ひこつひるるなり

九月盡

縱以嶠函爲固難留蕭瑟於雲衢縱

今孟賁而追何速爽籟於風境 順

雲衢ハ過行秋景色の蕭瑟ハ谷高秦の嶠山函谷のニの關ハ固て  
も留難く秋氣色の爽籟ハ秋風の吹去境ハ遮んとて齊の孟賁生る  
牛の角をぬく剛力ハ追て追むとも去行秋ハ是れ也  
是ハ九月尽の日佛性院を秋を惜詩の序なり

頭目縱隨禪客乞以秋施與太應難

我が頭目ハもと禪を修る安んじ望ん任せらん秋ハ惜くて施ハ與一順  
寺院その詩ハ法華提婆品ハ頭目體腦身肉手足不惜軀命と云依

文峯按轡白駒景詞海艤舟紅葉聲

九月盡  
縱嶠函を以固と  
爲とも蕭瑟於雲  
衢に於留難。縱  
孟賁を人而追今  
も何ぞ爽籟於  
風境に於速ん

頭目ハ縱禪客の乞  
小隨とも秋を以施與  
せんハ太難る應

文峯に轡を按す







秋

曉露に鹿鳴て花始て發百般攀折一時の情

秋

字彙王篇等に秋蕭蒿同種也蓬の類なり揚氏漢語抄に鹿鳴草とあり今秋を是に用ひ和訓

異朝ハ秋ハハマの類ハ万葉小椿の字もハハ國史ハ芳宜草とあり秋の和名波木鹿鳴草用來也リ

曉露鹿鳴花始發百般攀折一時情

新撰萬葉集の詩秋に鹿鳴草の名あり曉の露に鹿鳴の花發めて秋の千草の中にとり此花の美に於て百般攀折一時の情

拾遺

秋の野に秋なるものかたげれも流るるなりそのまひてと

拾遺集に小波岡にとりぬるや秋をハ詳す秋夫が結繩

かたげれ枯る枝を流らるるやとんとするハととり強て説くハ

家集 秋の野に秋なるものかたげれも流るるなりそのまひてと

花の散るる色も秋なるものかたげれも流るるなりそのまひてと

秋の野に秋なるものかたげれも流るるなりそのまひてと

蘭

紫に白の二章一名詩家蘭花用和歌ハ兼用又ハ

春蘭夏蕙秋芝冬菰の別ありと

前頭更有蕭條物老菊衰蘭三兩叢

前栽の頭秋の杪物の景色も蕭條菊も老蘭を衰かに

扶來豈無影乎浮雲掩而忽昏叢蘭

豈不芳乎秋風吹而先敗

一物集に出る菟裘賦魯の隱公免裘と云を管て老を天を



凝て漢女が顔に粉を施如滴て鮫人の眼珠泣に似たり

曲敬馬て楚客の秋の絃韻夢斷ては燕姬が曉の枕薫り

松樹千年終は是朽槿花一日自為榮

來而雷不薤穽有晨を拂之露去而返不槿籬暮に投之花無

月詠國定抄

大臣進忠節成... 親王... 營多... 投置... 扶桑... 掩... 風吹... 凝如漢女顔施粉滴似鮫人眼泣珠

曲敬馬楚客秋絃韻夢斷燕姬曉枕薫... 蘭の花... 宮中の美女... 曲驚馬楚客秋絃韻夢斷燕姬曉枕薫

ぬ... 古... 誰...

槿

木槿... 槿花... 槿花一日自為榮

松樹千年終是朽槿花一日自為榮

放言の詩... 生... 幻... 來而不雷薤穽有拂晨之露去而不

返槿籬無投暮之花

前中書王

願文無常... 歌... 願文無常の句... 薤露蒿里... 齊の田横... 人を送る挽歌... 蒙求の出... 生來一人も留らざる槿乃

卷之三

七

七



龍のく晨の露のく下び去る人の返さる  
櫛の籬に夕ぐび咲まら花を死にむと

ちがつれあきとらん秋をいばるまに  
道伝 中将

新勅撰よみ人あはれ 薙を人の顔に  
朝露の間かき  
の誰ともちがくはつるやとや

切の枝ははらばらとらん人  
花のさきとらん人  
拾遺集哀傷の部に思ひん  
あり人の紅顔  
忽白骨とらん人  
人が薙はえらく思ひ  
又花もさきふらん  
あきとらん人

前栽 庭の前へ樹木草花を  
栽りくを云

多見栽花悦目儔先時預養待開遊  
秋の花を栽を願ひ多く  
世上の花は愛され人  
を多に  
其時々先づめて前ころ  
糞培をて花は待預まらる

自吾閑寂家僮倦春樹春栽秋草秋  
上の通 絶句 一章 閑寂ひたより  
暮居と家僮倦性同  
成ころ春の樹春栽時に先づ  
て養てを花もさきくべ

閑思春汝花紅日正是當吾鬢白時  
梅の實生をて花待久に樹は植紅の花盛  
の人の日かえんと  
思ひぬとせば鬢白髪生する時  
を當ん汝と今栽樹は長

曾非種處思元亮為是花時供世尊  
菊の苗を植る詩 陶淵明名 潛字 元亮 菊は愛り  
今此 菅  
菊を栽るかの元亮は思ひ我も  
愛んよゆべ花は待親尊に供ん

ちつとんばもとらるる  
明極

隣り床裏の花をまね惜て  
のみを思は居る昨日を  
床の塵を掃を清浄とも  
り此花は妹とがさき  
愛らるれば  
塵をぬれ思ふを  
抑てつるを  
わじとらるるを  
咲らるるあり

とかにうらむをとも  
なふ家のをくか  
まいわんすん  
原本 作是

前栽 多花栽目悦  
悦し儔を見ば  
時の先預養開  
待遊

吾閑寂して家  
僮の倦自春の  
樹ハ春栽秋草

閑小汝花の紅日  
正是當吾鬢白時

曾種處元亮  
思非是花の時

世尊に供んが爲  
かり



紅葉  
付落葉

不堪紅葉青苔地。又是涼風暮雨天。

紅葉 付落葉

花を大切に思ふより露の置もろろのやんと花の  
さるぐものちのちとさくら草花はさるるさる

黄纈纈の林寒  
水浄て風無

不堪紅葉青苔地。又是涼風暮雨天。

洞中清浅  
琉璃水庭上

黄纈纈林寒有葉碧琉璃水浄無風

蕭條  
錦繡の

洞中清浅琉璃水庭上蕭條錦繡林

外物獨醒  
松澗の色餘波合

外物獨醒松澗色餘波合力錦江聲

カハ錦江の聲

秋ハ樹々の梢紅葉て酔るに外物の物ハ松多ハ澗の色ハ  
秋の酒ハ酔テ獨醒テ屈原字ハ平云賢人楚の懷王ハ仕ルハ  
者ハ言ハ信王屈平を遠く流されるハ澤辺ハさまひハ錦江の  
漁父船ヲ見テハ三問の大夫ハこれ來るヤ答テ世こそテ獨り

我独清り衆人皆酔り我独醒テ此故ハ放されテ云を取テ餘波ハ  
紅葉をちりちり風の色ハ波ハ落葉の音ハ波の奇ハ聲をそカを

恰せると蜀の地錦をわくハ光を出すと云水に散浮る紅葉ハ  
錦江すくハ似ると云此詩山水唯紅葉と云題ハ上の句ハ山下の水を云

あゝあゝ時をいへりさるる下葉のさるる  
古今集ハのさるる色ハつたさるる露ハ時雨ハ漏山ハ下葉ハ  
色ハ深ると多病も書又近江の守山と云る定家卿奏歌とす

むらゝの海とさるるさるるのさるる  
端足と書何端何足とある錦と云をゆくと云大和国佐保山の作  
ゆみちと雪に起こらさるる間ハ多くの錦と云る又切裁縁語

落葉

落葉



三秋而宮漏正長。空階雨滴萬里而鄉園何小。在落葉窓深。

秋庭拂不藤杖。閑踏梧桐黃葉。携閑の梧桐黃葉。閑踏行。

城柳宮槐漫搖。落秋悲貴人の心に到不。

三秋而宮漏正長。空階雨滴萬里而鄉園何在。落葉窓深。  
張讀

夏過秋を第三の九月ともし。夜長い宮中の漏をさるるに明ぬる人の跡をさるる空の階に夜の雨軒の傘が滴る。是ハ深宮に閑居する人。物をもひのさるる下の句ハ故郷を萬里の小まると。家園ハ何れの程とをさるるぬに落葉小窓をさるる心をもさるる閑居のさるるなり。

秋庭不拂携藤杖。閑踏梧桐黃葉行。  
閑居の詩ハ誰問人とかく庭を拂うと及藤の杖は曳て黃散ると。梧桐の葉を踏行ありの手の作意ハ梧桐ハ諸樹ハ先づちて落葉ハ

城柳宮槐漫搖。落秋悲不到貴人心。  
早且に帝城に至り壬氏の僕射日本の官ハの官たる人ハ送る貴人ハ。此人をさるるて云ハ都城宮掖の柳槐を漫に搖落せとも貴人の心ハ秋の悲もわはほ唯我くいハこそとのわはほ良しといはる。

梧楸影中。一聲之雨空灑。鷓鴣背上。數片之紅葉總殘。  
梧楸の葉の落る雨一とさる降來る聲小似て實の雨も空灑とさる。鷓鴣と云鳥ハ日向以南に飛霜をさるる冬の夜ハ樹の葉を背ハ覆て飛と雀約古今註小さる其背ハさる數片の紅葉の殘て樹ハこれ散落をさるる作さる。神泉苑ハ葉枝風枝疎序

樵蘇往返。杖穿朱買臣之衣。隱逸優遊。履踏葛稚仙之藥。  
樵蘇ハ山路を往つ返つ木を樵てあつ錦を杖をりて穿と朱買臣字ハ翁子會稽昔に住て家貧一書を好て薪を肩かき讀り。竟に漢の武帝に仕侍中より會稽昔の太守かうつる帝のさる富貴かて故郷へさるる錦を着て夜行とこの處に彼衣をりて。錦ハこれさる隱逸とて世を逸山に隱さる人ハ紅葉落散る杖踏て優ちる遊戯なる其履ハ丹藥をふむとあると云葛稚仙ハ仙人

高相如



嵐に随落葉蕭蕭  
瑟を含石に濺飛  
泉ハ雅琴を弄す

夜を逐て光多吳  
苑の月朝毎に聲  
少漢林の風

わりの金丹を煉薬とす其色紅葉小似る是は落葉が山中の路に  
満るは題する詩の序之樵蘇隱逸山中夜と薬ハ落葉の色云

隨嵐落葉含蕭瑟濺石飛泉弄雅琴

山の青が紅葉小赤變水も落葉小色変りたる題  
山に紅葉散す秋の嵐蕭瑟含つ樹葉が飛び石に流濺飛泉の音

雅樂の琴は彈ずり小似り上の瑟の字器小取とて琴の類也琴瑟相  
對せり舒氏の女音樂好々々新を採に行やぐ坐して動ぜて泉と

やる人其泉のやとて絃哥も也泉涌流ると云故事も泉  
小琴はより合せ作て舒姑泉のて文選の註に出り上の句山下水云

逐夜光多吳苑月。每朝聲少漢林風

日にまゝ落葉もる題之 吳王の苑の梢が疎にるまは月  
光が夜を逐て多ゆく漢の上林苑の木が散に隨て朝毎風の聲少

新古今  
あまの川 紅葉がささるうづのよれ秋の香はせぬり 一人

大和国飛鳥川の水小葛城山ある也かの山に秋風吹て紅葉散るとに  
あま此川に流と来るすもはと古今のまはるの山にまはるの躰

かゝり月を逐て光多吳苑の月朝毎に聲少漢林の風

後撰集にの文人志が 神南備森林和州の石所  
時雨ととの森の木が葉が落散て雨のあつたて

人をもささるうづのよれ秋の香はせぬり 一人

深山の紅葉誰人もかく深て散らむんか意  
又前にも出る朱買臣が錦を着て夜行と云故事

雁 付歸雁

萬里人南去。三春鴈北飛。不知何歲

月得與汝同歸

唐の玄宗天寶の末揚國忠丞相のすゝ兵戎をて雲南の王閣羅  
鳳は征む行もの万人に入も歸り得ず是は萬里人南去と云

わろ第三の春三月の比雁は北に歸る期あつとも南に  
むいゝる人ハ何の年月も北に歸來らん其期もまぬ

雁 付歸雁

萬里人南去。三  
春鴈北飛。不知  
何の歲月。汝與  
同歸。とを得ん











蝨の聲聞てを壁  
の孔穿して鼠  
の厭空心はて鼠

山館の雨の時鳴  
て自暗野亭の風  
の處織し猶寒

叢邊怨遠して風  
の聞暗壁底吟幽  
かして月の色寒

蝨の脚の短きを嫌ふ其下に蝨の鳴かまひすや壁の  
心の空より鼠を穿て風通りて寒は厭ふ

山住する館に雨の時蝨の聲をのふ聞へ空に木立地は草小直幹  
を合して暗くも鳴知さるる野辺の草亭風の吹れ蝨の音も

一説に暗く雨夜の意寒く秋の夜寒を織り似る形あり

叢邊怨遠風聞暗壁底吟幽月色寒

今こんとけたのめん秋の夜はあつまつまの虫のなき  
原本作  
者名欠

鹿

蒼苔路滑僧歸寺紅葉聲  
乾て鹿材在

暗に萍食身の  
色がく變せ遣更  
小草加徳風に隨  
て來

鹿

蒼苔路滑僧歸寺紅葉聲乾鹿在林

暗遣食萍身色變更隨加草徳風來

延喜の御時肥後國より白鹿を獻し  
吉凶を問ふ時奉り詩へ詩へ鹿鳴食野之草とある  
君子之徳風を云を取て草も傳君の徳代の風が隨て遠方より來



白鹿の至て吉瑞なるを述ぶる周小白狼の瑞を得て王に高嶺より刻漢に黃龍の祥を得て石の泰山に彫日本や白雉白鳥出吉瑞あれは拾遺  
みづちせぬとてのしにすし海をたのむるや秋はあふらん 徒室  
常盤山ハ山城国太宰の北ありと云々小倉常住不変のてらなるもせむ  
せぬと云々なり紅葉かこそ秋のまゝなればみづちせぬとてのしにすし海をたのむるや秋はあふらん 徒室  
もまゝらん  
と云々なり

可憐九月初三日夜露似真珠月似弓  
露  
可憐九月初三日の  
夜露ハ真珠に似  
て月ハ弓に似たり

露滴蘭叢寒玉白。風銜松葉雅琴清  
露滴蘭叢ハ滴て  
寒玉ハ白風ハ松葉  
を銜て雅琴ハ清  
新古今  
さしづのわらわをのわらわ秋のつとむるをらるるを  
漸古今集ハあざけり野辺のとあり 小男鹿を鹿のそと秋のたぞ  
鹿の事といつて男鹿のいもるは花あはれつと云々此ハ程と云と  
霧 陰陽怒て風とまりて霧とるる又霧ハ百杯の氣  
陰陽怒て地にのりて天小行る霞ハ似て異なり  
竹霧曉籠街嶺月。蘋風暖送過江春  
霧ハ曉籠街ハ  
嶺月ハ  
送過江春ハ  
白  
源英明  
の清ハ雅ハ雅雅樂風雅と云々同一正と云本ハ街松葉ハ作也

夕霧の人枕を埋  
を愁と雖猶朝雲  
暖かくて江を過春  
送

雖愁夕霧埋人枕猶愛朝雲出馬鞍  
夕霧ハ夕霧ハ  
埋人枕ハ  
猶愛朝雲ハ  
出馬鞍ハ







風底に香飛て雙袖舉月前に杵怨て兩眉低

年年の別思秋の雁に驚夜夜の幽聲ハ曉の鶏到

側身存一昔ハ腰の圍しめいめん  
身幅を違であらん

風底香飛雙袖舉月前杵怨兩眉低

風の底に香飛て袖の香飛て相封てうろ二人の袂がなまぐ  
擧る月の明る前杵の音も怨るもの思あるふも兩の眉低

後中書王

年年別思驚秋雁夜夜幽聲到曉鶏

上と同じ一章の内の句に夜う折も秋の雁の鳴るるを今年も夫  
小別と此の秋の秋の驚く年々に思ひぞ年々の別思と云り夜

く夜を打幽る聲が曉雞のちくまぐももぬの  
中書王具平親王此詩を作してより世々文名高し

新勅撰

か夜う折も秋の雁の鳴るるを今年も夫

月の清さをか夜を保せし砧の音の聞るるを今宵の  
月にまぬぬ人あらうと空小しきり知らるる

和漢朗詠集抄卷之三 終

和漢朗詠集抄卷之四

冬

初冬

十月江南天氣好可憐冬景似春花

揚州江都縣の南湖に四千里揚子江の南を江南と云此邊他より白  
暖くて冬を春の如く憐面白く云意冬十月の天氣他はまらう好はそ

冬かぎる春花の比の景色をさバ  
いふてうらやうであらん

四時零落三分減萬物蹉跎過半凋

四季の内が零落て三分減一冬二分減残草木その  
外萬の物蹉跎と時を失て霜枯半に過て凋冬景色を蹉跎はつとく

床上卷收青竹簟匣中開出白綿衣

四時零落三分減萬物蹉跎過半凋

床上卷收青竹簟匣中開出白綿衣

冬 初冬 十月江南天氣好可憐冬景似春花







真澄鏡を畧して十寸鏡と書二尺の鏡も鏡かんも我が影も入年も暮ぬと思惜とてふふんふんふんふん老ぬの意あり

### 爐火

爐火  
黃醅綠醕迎冬熟絳帳紅爐逐夜開

客を招くと作黄醅綠醕が冬迎て此節熟いるも主百儲事足もり絳帳ハ赤絹を垂る紅爐ハ爐火之夜毎小開客を招て逐云

春無野馬聽無鶯臘裏風光被火迎

春無野馬無聽鶯臘裏風光被火迎

冬の寒れも火あきば春のよた題火の暖る春の心地もれ管三畝ども春に野馬春の詩出をもく聽に鶯もさやが臘月梅の詩の裏春の風光あはまつくく爐火のあへ春の草に光あり風吹うごまはさこら

此火應鑽花樹取對來終夜有春情

此火ハ應に花樹取對來終夜春の情有

上に通絶句此爐火ハ花の樹を鑽て取らるやあん對ハ終夜春の情ある周書月令火を更らる春、榆柳夏ハ棗木ありす季

夏ハ棗木杯さる秋、柞櫚冬ハ槐檀まの火を取と云

多時縱醉鶯花下近日那離獸炭邊

多時ハ縱醉鶯花獸炭の邊を離ん

多時ハ鶯の音を愛花の下に酒を飲とも近日の寒天ハ爐火の邊ハ離る羊琇と云人獸の形の炭を燒人形ハ酒瓶を抱せ其酒

温ませ客の前に出とて興を催しを獸炭と云

うづまのわいさし一時的かかまらむぞうれさ業平

云出さる以前下にこそ悲し言出てしん

### 霜

霜  
三秋の岸雪花初白一夜林霜葉盡紅

露結て霜とある大戴礼ハ露霜ハ陰陽の氣あり陰氣勝ると凝て霜とあるとあり

第三の秋九月川の岸に雪の降ハ花初て白咲一夜のうちに霜は置を林の樹の葉とくく



萬物、秋霜能壞色。四時、冬日最凋年。

萬物、秋霜能壞色。四時、冬日最凋年。  
萬の物が秋の霜の色壞四時のうち冬日最凋すの物  
白

閨寒、夢驚。或、添孤婦之砧上。山深、感動。先、四皓之鬢邊。侵。

閨寒、夢驚。或、添孤婦之砧上。山深、感動。先、四皓之鬢邊。侵。  
紀納言  
淮南子、青腰の玉女、霜を司る神なり。此意を題する賦あり。良人を思ひつゝ、孤婦が夜をもちて、独寝の閨の夢寒さし、砧の上の霜を置添ともて、夢驚まゝ、深山に霜のさるる、はてしに四皓が鬢髪白くするらん、と心に徹し、思ふ意を感動と作り、史記に東袁公綺里季、夏黃公、甬里先生とて、四人の賢者、秦の治を避て、南山に、老て首皓りゆ、四皓と云漢の高帝の時、張良が謀りて、太子を翼  
君子、夜深聲不警。老翁、年晚鬢相驚。

君子、夜深聲不警。老翁、年晚鬢相驚。

君子、夜深聲不警。老翁、年晚鬢相驚。  
君子、鶴と云諸鳥かすれ心緩かて、小人の性急なるに異、皆丞相るる小取り、鶴が霜降を聲を飲て啼すといふ、是ハ初霜の詩なり。

聲聲已、斷花亭。鶴步、初驚。葛履、人。

聲聲已、斷花亭。鶴步、初驚。葛履、人。  
鶴の聲、夜深霜降、小聲言、いんやと云老翁が年晩霜の置るをえて、我が鬢を左とをわんと相驚と作りて、初霜の意なり。  
遠城花亭の鶴霜をいづ鳴る意を聲々已、断と云月の詩、  
葛の履を履る人か歩かざる履の冷やゆる霜の降るよと驚く  
夏、葛かて組る履を履る皮の履を用る也、詩に糾々葛履  
以て霜を履るいとあども、魏の国俗冬も葛の履を用る

晨積、瓦溝。鴛色、變。夜零、華表。鶴舌、聲。

晨積、瓦溝。鴛色、變。夜零、華表。鶴舌、聲。  
晨の霜が瓦宇の水溝に置いて鴛鴦の形の小作る瓦の色を  
變、白くする夜霜が遠城の華表、月の詩、小零て、鶴が聲を舌で啼ぬ  
夜はさむ流るる水もさむをいづれくもひもあむをさむん  
霜夜はさむ寒寝覺の聞、鴛の声をさむ、けふらもの  
霜をさむ、いづぬるやどに置るといふもさむ

雪

雪

天地陰を積で、温るるを雨とあり、寒るるを雪とさる



曉梁王之苑に  
入る雪群山に  
満夜庾公之樓  
小登も月千里  
小明り

銀河沙漲三千界  
梅嶺花排一萬株

雪似鵝毛に似て飛  
で散亂一人ハ鶴  
髦を被て立て徘徊  
す

或ハ風を逐て返  
不群鶴之毛ハ  
振如亦晴に當  
て猶残り衆狐之  
腋を綴ると疑  
翅群を得似  
り浦小栖鶴心ハ  
興に乗舟に  
掉人ら應

曉入梁王之苑雪満群山夜登庾公  
之樓月明千里  
謝觀

白と云苑はひさ終布山五臺山をいふ名高山を築山小象り  
園と云苑はひさ終布山五臺山をいふ名高山を築山小象り  
つた雪の朝鄒生枚叟と云才子を將いり雪を弄ひし故に  
群山と作り庾亮字元規南樓小登り月を弄ひ一人其樓  
より見こせば月千里を  
照し白くも

銀河沙漲三千界梅嶺花排一萬株

雪の降銀河の沙三千世界小漲落似し梅嶺ハ大庾嶺 白

雪似鵝毛飛散亂人被鶴髦立徘徊

雪の降鵝の毛の散乱て飛似し一人ハ雪中に徘徊ハ鶴の髦を被て立て徘徊す 白

或逐風不返如振群鶴之毛亦當晴

猶殘疑綴衆狐之腋  
紀納言

春雪の脚より雪風を逐飛行て返す群鶴の毛を振如し狐の腋ハ白孟嘗君狐の腋の皮を綴狐白裘を製長是を着すハ万病とくを愈るとも秦の昭王に奉りし此故事を晴て殘る雪を人をも多くの狐の腋を綴ると疑

翅似得群栖浦鶴心應乘興掉舟人

天曆の帝神泉苑の行幸小雪を戲覽あつての御製衣村上御製雪降るハ浦に栖鶴の數添て群ると思はる其興淺くハゆの王子猷雪の夜舟に乗て安道を尋ひ心ゆす王子猷山陰に居し雪大に降るに眠さめて戸をゆけし晴るる月あたらちるもあつちまち戴安道が刺しに在を思ひ出舟小掉可いして下り行小其門近かり夜も明るも至すて歸る人其故を問む興小乗して興つた歸る人ぞ安道いもえんや世説蒙求等出



庭上於立頭鶴  
為坐於爐邊  
在在子龜不

班女が閨中秋扇の  
色楚王の臺上夜  
琴の聲

立於庭上頭為鶴。坐在爐邊手不龜

雪の降庭に立人ハ頭白く鶴の如し爐火の邊に坐一在  
手も龜ず莊子に宋人手の龜ざる藥を以て寒中帛を濯いり  
是を寒中軍士に用む其利大なり物ハ用やうて益小大あり  
あり龜の字をまると訓はるの音も鶴龜の字對つたり

班女が閨中秋扇色楚王臺上夜琴聲

班婕妤漢の孝成帝の寵をうけ白くすとのかて扇を製  
竈あり時ハ君が懷袖ハ出入一扇をうけ秋至て竹窓ハ弃ちり  
の引く扇詩を作らり 納涼扇の詩 云ハ雪の白は班女が秋の扇  
もとも團雪の羽の色ともいひて琴小回雪の曲ありらぬ

雪の飛めぐるを楚王の臺の上  
琴を弾する聲と作り雪の題

ゆきあつりしみる初雪のよけは雪ふるら

拾遺集にありしとるとり降やぬんとり源景明の哥  
吉野ハ深山ツて雪とやらるるこころいふもさるる

古今 みるは山も雪もいし古郷はむらりまらるる  
古今 詞書に奈良の涼にまらるる時をりらるるいふてあるとわり古郷ハ  
奈良のよめるを寒く成増ハ吉野山ハ雪降つりし

古今 ちかき樹はのれを雪がらうづも梅とて折は  
白梅の雪の色をまらるるをまらるる木毎といひ梅の字は  
ころも一姿あり上下うけ合はる哥とてこころいふて

氷 付春氷 十二月大の寒ハ氷化して氷とけ陰氣  
りもあつまるれ説文に氷ハ水の堅なり

氷 水面に封して  
聞の浪無雪林頭  
に點して見の花有

氷 水面に封して  
聞の浪無雪林頭  
に點して見の花有

氷 水面に封して  
聞の浪無雪林頭  
に點して見の花有

霜 妨鶴 喉を妨く  
寒く露無水狐  
疑を結て薄して

霜 妨鶴 喉を妨く  
寒く露無水狐  
疑を結て薄して

霜 妨鶴 喉を妨く  
寒く露無水狐  
疑を結て薄して



氷有

春氷

氷消て水を見まば  
地より於多雪  
霽て山城望ハ盡  
樓ハ入

氷消て漢主覇  
を疑應雪盡てハ  
梁王枚を召不

霜と云ふは狐の性なり疑ふ狐疑是河の汀に聞水の聲あり氷薄  
と知て渡す音ありは厚と知て涉る水ハ氷多ク少ク浪の音ありと心  
新撰万葉  
氷消の月影はつらつら水ハ寒はにや氷と云ふ月ハ陰精中て水と一輪  
の心あり此哥も作者の名也亮惠法印隱名作者不因て補ふ古今ハ光

春氷

氷消見水多於地雪霽望山盡入樓

思黯と云人の別荘が南方にある早春こゝに遊んと故憶て作しり白  
春の氷解庭ハ水の湛る地より多く雪の雲霽て山を望まば近  
景色はめでて云やう詩トヤ

氷消漢主應疑覇雪盡梁王不召枚

雪氷消する題也上の句ハ水下の句に雪消る意を作し漢の  
高祖より九世を後漢の光武皇帝と云時に王莽漢室を傾け光武ハ

胡塞ハ誰能  
節を全せん虜陀  
ハ還て心臣忠  
失ん

胡塞誰能全使節虜陀還恐失臣忠

是る上ハ雪下ハ氷の解るを題を前の詩に似たり漢の武帝相規  
の時蘇武胡塞ハ使ハ匈奴を囚食物を與ず海島に羊を養せり  
武旃毛を雪に和食て命を保ち十九年の後歸て使節を全して  
漢の帝ハ見也秋の部下の歌ハ節ハ漢の使ハ旗印と云今詩の意雪消  
ハ誰ハ胡地ハ使を勤めんと氷ハ解れば虜陀河ハ臣の忠を失て  
後漢の王覇ハ偽者となんを恐る前の詩ハ叙する塞ハそん若の

氷消の月影はつらつら水ハ寒はにや氷と云ふ月ハ陰精中て水と一輪  
の心あり此哥も作者の名也亮惠法印隱名作者不因て補ふ古今ハ光



霰

磨牙米鼓て聲  
聲脆龍領珠投  
て顆顆寒

續後拾遺集小山河の氷はけり春風に谷の氷はけり春風に谷の氷はけり  
平兼盛の歌 谷の氷を春風吹解かして山川の水まはると汀増れり同

霰

天小風寒の氣をけて雨湿の點滴中虚に凝て霰と成る  
その微なるを霰といふ雪と理同じく霰霰の降は風殊小寒

磨牙米鼓聲脆龍領珠投顆顆寒

鹿の屬牙白くて白米小似り霰の降来るハ米を箕かき  
敷てくちる聲脆く聞ゆ龍ハ珠を室といふ如意宝珠とて之は莊子に人有  
て淵に投じ忽ち龍の眠るにわきて領下の珠をもちて向う霰の降ハカ  
珠を投じ小似て顆顆といふをさぐるて寒く領ハかたがひなり

古今六帖  
古今  
磨牙米鼓聲脆龍領珠投顆顆寒

深山ハ興山外山ハ端の山正木の葛ハ木の名天照大神岩戸にこの  
あふれに天鈿女命眞辟葛を髪とす古語拾遺に云う又此歌神樂  
の庭燎のさ

とくさう

佛名

十二月一万三千佛の畫像を安置して其佛名を  
唱へ六根の罪滅すると元興寺の靜安律師

佛名

香火一爐燈一盞  
白頭よして夜佛名  
經を禮す

承和年中に教皇も國家の爲めに佛名を禮拜し始めて  
内裏に行ひ漸天下に遍ると貞觀格に云う

香火一爐燈一盞  
白頭よして夜佛名  
經を禮す

香自禪心無用火花開合掌不因春

香ハ禪心自り  
火を用ひ無花ハ合  
掌に開て春に因  
不

仁和四年の冬讚州任國の時誠海會年中の罪をせんげするの御作  
長篇の詩なり今供る香ハ吾禪心の火を用ひて尋常の火を用ひて  
花ハ吾合掌しむらに花さむ春小も因ぬ○菅家花草第  
四に此詩香出善心とあり善根植真心の大小香を撫

香ハ禪心自り  
火を用ひ無花ハ合  
掌に開て春に因  
不

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登

あまの年とれははくつづつものこそすめやぬん兼登



十二月家くに佛名行と導師階れくわろふれと送り迎へいそぎありく  
かぞ師走と云ふあり今年成り来春成むく吾身老とやるを何か  
かく急ぐらんといふ拾遺集にも出されど  
詞が除夜の詠して佛名の意なり

拾遺  
そはちいつらる飛らうけしあつ白きよきんくんと要ん

年中作罪も佛名の功德にうて雪のつめて消さすく  
消滅せよとの意らん下知のらんといふ

和漢朗詠集抄卷之四終



